

中国海軍ニュース：大連 001A 空母から上海 002 空母を予測する

漢和防務評論 20170303 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

大連で建造中の 001A 空母は、旧ソ連のクズネツオフ／”遼寧”空母の完全コピーであると、漢和は指摘しました。
したがって致命的欠陥も踏襲している、と。この欠陥を払拭するには、カタパルト方式を採用するしかない、と助言しています。
記事では、旧式の同じ空母を造る意味がわからない、としています。

KDR 東京平可夫特集記事：

2016 年 8 月、KDR が大連で建造中の 001A 空母の図を対比した結果、001A の全体設計、外形構造が旧ソ連のクズネツオフ／ワリヤーク級空母の設計を完全に踏襲していることがわかった。2 者の寸法、外観、外形設計構造は瓜二つであった。これは世界の空母建造史上の奇跡である。ワリヤーク空母建造の知財権は、サンクトペテルブルグの NEVSKOY 設計局が保有する。同艦の総設計師は何度も KDR を取材を受けていた。当然中国人は、パテント料を支払っていない。元来 KDR は、001A の外形設計は、すでに稼働しているワリヤーク／遼寧を参考にしたのだと考えていた。しかしそうは言っても 001A の船体外形の細部については若干の相違があるのではないか？独特の違いがあるのではないかと期待した。現在見たところ、001A の外形は”遼寧”の完全コピーである。多少異なるところは：001A の艦橋の長さが”遼寧”に比べて、やや短いことだ。すでに 3 年前に 001A の設計者が KDR に対し密かにこの情報を伝えていた。したがって KDR はすでに 001A の艦橋の長さを知っていた。

旧ソ連の 30 年前の空母を完全コピーするなど、中国人だから出来る。したがって KDR の中国軍事工業界に対する基本的評価は一貫している：高く評価する必要もなければ、中国の軍事工業生産、設計能力を低く評価する必要もない。

001A の外形設計がすでに証明している：中国軍事工業が独自に空母の設計ができるようになるのは、はるか将来のことである、と。

しかし過少評価する必要はない。このような巨大な空母の複製が、このようなスピードで建造出来るのも中国人だけである。他の国では不可能である。欧米の海軍先進国は、当然このような路線は採らない。中国の軍事工業モデルは国際的にも独特のものと言える。

001A と”遼寧”の話に戻ると、001A は、”遼寧”の外形設計図をそのまま採用した。長さも幅も同じである。甲板の尾部は約 15 度傾斜し、エレベーターの位置も寸法も完全に同じである。

甲板全体の外形は完全に同じであり、KDR はスキージャンプ台の大きさ、角度

も完全に同じであると見ている。

クズネツオフ級空母は元来 **KLINOK** 艦対空ミサイル、**KASHTAN** 弾砲結合システムのプロビジョンを有していた。中国は明らかにこの位置に”遼寧”と同様に **HQ-10** 艦対空ミサイルを装備するであろう。航空機が着陸する甲板の前縁の角度も完全に同じである。このような固定化した設計は、世界の艦船の歴史の中では見ることはできない。

もし **J-15** が **SU-33** の完全コピーであるとするならば、それはそれで理由がある。航空工学は原型機の改造を許さないからである。改造した場合は、いかなる場合でも風洞試験が必要となる。艦船のコピーも同じであろうか？当然一定の道理があり、重心バランスの問題を考慮し、船体の重大な改造を行った場合、新たな水槽実験が必要となる。このことから判断すると、中国は、**001A** に対して新たな水槽実験は行わず、ワリヤグのデータを完全流用したと思われる。

”遼寧”の改装を通じて、**001A** の内部構造は、多少ワリヤグとは異なるはずである。後者は、**100** 発以上の **SS-N-19** 型長距離艦対艦ミサイルを取付けていた。これらの船室は居住区或いは航空機格納庫に改装された可能性がある。ワリヤグは原則的に **24** 機の **SU-33** を搭載できる。しかし搭載ヘリの数を減らし、更に小型の **MIG-29K** に換装すれば、ワリヤグは最大 **36** 機の **MIG-29** を搭載できる。

30 年前に設計されたワリヤグは、実戦運用でいかなる致命的欠点があったのか？同艦誕生の日から、旧ソ連およびロシアの軍事雑誌は、常に分析していた。**KDR** はその中の一部を引用したことがある。全体的に見て、欠点は **001A** に完全継承されるはずである。例えば、**J-15** 戦闘機がスキージャンプ発進をする場合、燃料及び武器搭載量に制限を受ける。艦載攻撃機と戦闘機は同時発進ができない。艦対艦ミサイルを携行した攻撃機の発進過程では、その他の航空機は着艦不可能、などの重大欠陥があった。**KDR** はこのようなロシア空母が米軍空母戦闘群と戦える実力があるとは思わない。しかし台湾の東海岸を威嚇するうえでは一定の実用性がある。艦載の **J-15** が長期にわたり制空権を獲得できれば、花蓮、及び台東の地下基地を攻撃することができる。空母を開発し、台湾の東海岸目標の攻撃に用いることを劉華清が当初大々的に主張した。彼の回想録にも書いてある。

中国軍は、台湾東海岸にますます興味を持ち出している。**2016** 年に **H-6K**、**SU-30MKK** が東海岸を飛行した。今後この種の行動がますます増えるであろう。ロシア式空母の上述の構造上の欠点を徹底的に解決するためには、カタパルト型の空母を建造するしかない。したがって上海の **002** 型空母の外形の動向には注意しなければならない。

KDR は、中国の設計師が独自の優れたアイデアを得ているとは見ていない。したがって **J-20** のインテーク設計を見れば、それがわかる。全体設計図そのものを入手できない状況の下では、中国設計師は”技術の寄せ集め”主義を採用したのである。中国語では：東抄抄、西抄抄！（盗作する意）という。**F-35** からインテークを、**F-22** から前部胴体を、**1.44** から後部胴体を拝借した。

最近公開された葫蘆島の空母パイロット訓練センターの写真をみると、中国のカタパルトシステムは **2** 種類並行しているように見える。蒸気カタパルトと電

磁カタパルトである。したがって2つのカタパルトのレールの長さは異なる。2つのカタパルトを同時に開発する可能性はないのではないか？意義がない。米軍の空母訓練施設は2種類のカタパルトが1セットずつある。

もしKDRの判断が正しければ、002の外形設計は、航空機の発進方式によって決まる。もしULYANOVSKのようなスキージャンプ式とカタパルト式の併用（中国海軍設計師は内部でこの種設計を検討した）であると、ULYANOVSKの設計を踏襲する可能性が高い。中国は設計図の一部を入手した。

カタパルト方式を採用するならば、それは米国空母の甲板方式であり艦橋の外形は001Aに近づく。003型空母では電磁カタパルトを採用する可能性がある。今日のロシア空母クズネツオフ号を見れば、001Aの明日が予測できる。昨年11月からクズネツオフは地中海に入り、真の意味で初めての航空攻撃を行った。1月になる前にMIG-29、SU-33が各1機墜落した。SU-33の事故原因は、アレスティングワイヤの断裂であり、MIG-29の事故原因は不明であるが、発進直後に墜落した。

ここで1990年代初期に、ロシアの軍事評論家たちがクズネツオフの戦闘力の総合評価を行ったのを明らかにしたい。すなわち、大型のSU-33はスキージャンプ時の安全性は問題はないか？また最も重い戦闘機をアレスティングワイヤにヒットさせるのは危険性が高い？と。MIG-29の発進時の安全性についても評価を行った。全体的にみて、中型、大型戦闘機をスキージャンプ方式で発進させる方式を採用したのはロシアのみであった。当初論証が不十分であった。中国やインドは学生である。SU-33はすでに2回目の着艦時に墜落している。J-15が待つ命運は如何に？良いはずがないであろう。少なくとも2機のJ-15がすでに墜落している。

以上